

ISO/IEC JTC 1/SC2/WG2/IRG  
Ideographic Rapporteur Group

**Source:** Dr. SUZUKI, Atsushi

**Meeting:** Old Hanzi Special Group Meeting held in Harbin, China, from 2007-9-12 to 2007-9-14.

**Title:** Input to Old Hanzi Expert Group

**Keywords:** (none)

**Status:** Expert Contribution

**Short Description:**

This is a cover page to the attachment written by a Japanese Jaguwen expert who asks the Old Hanzi Expert Group to take full advantage of the achievement made by Jaguwen researchers.

**Proposed Conclusion / Requested Action:** the Old Hanzi Expert Group to discuss.

## Input to Old Hanzi Expert Group

Japanese SC2 recently invited Dr. SUZUKI, Atsushi, one of the most active Jaguwen experts in Japan, for consultation on the IRG Old Hanzi projects. After briefing of the project status, Dr. SUZUKI raised two major concerns on the following points:

- ✓ Some of the distinction/unification principles described in IRG N1271 do not seem reflect the achievement of Jaguwen research already done in the past.
- ✓ Adding Shuowen radicals to Jaguwen would work for convenience's sake, while Shuowen radicals might be of little help in attempting to classify them.

Based on his observation, he asks the Old Hanzi Expert Group if it is useful for the group to take full advantage of the achievement that Jaguwen research field has done in the past twenty years. Especially he emphasizes the following points from experience in the field.

- ✓ 《甲骨文編》(中國社會科學院考古研究所編 科學出版社 1965年), attempting to classify Jaguwen according to Shuowen radicals, resulted in inconsistent unification and the Shuowen radicals for more than a half of all Jaguwen were left unresolved. The Old Hanzi Expert Group might want to avoid repeating this.
- ✓ 《殷墟甲骨刻辭類纂》(姚孝遂編 中華書局 1989年) should contain the most recent and successful taxonomy of Jaguwen by the research field, which covers most from 11 sources that the Old Hanzi Expert Group is referring to. The group could reduce the time and efforts in developing Jaguwen repertoire by leveraging the work already established by Jaguwen experts themselves.

The attached are (A) the abstract of the original document (Chinese) and (B) the original contribution (Japanese).

Attachment-A : Abstract of "Input to Old Hanzi Expert Group" in Chinese.

Attachment-B : The original document "Input to Old Hanzi Expert Group" in Japanese.

----end----

## 关于Old Hanzi 审议情况的意见

2007 年9 月4 日

日本·茨城大学 铃木敦

### 摘要<sup>1</sup>

现在，根据Old Hanzi（以及WG2）系统而对甲骨文字进行的符号化作业（从零开始）正在进行之中。但在甲骨学界，类似的工作过去已经实施过2种方法。

其一是《甲骨文编》（中国社会科学院考古研究所编 科学出版社 1965 年）之编纂。它过分依赖《说文》而加以整理，很明显其包摄范围设定自身即不合理，而且可能出现 LABELING之处达到全文的 2 / 5 左右，参照现在的水准而言以失败告终也是不得以的。

另一为《殷墟卜辞综类》（岛邦男编 大安 1967 年）以及在此基础上发展的《殷墟甲骨刻辞类纂》（姚孝遂编 中华书局 1989年）的编纂。这种方法以公开发表的所有甲骨文字为对象，避开《说文》的束缚，以甲骨文字自身部首为基础进行了全面彻底的整理，虽然一些细节部分还有问题，但现已成为甲骨学界的规范标准。

现行根据Old Hanzi（以及WG2）所进行的工作，没有沿袭以上的成果，基本采用与曾以失败而告终的《甲骨文编》编纂方法同样的方法，其结局很明朗化。认识甲骨学界的经验和成果，活用《殷墟甲骨刻辞类纂》的成果，尽早朝这个方向转换，合理进行“符号化作业”，我认为可以节省庞大的劳动力。

注 1. 作为本论文的依据，笔者的诸篇论文全部刊载于以下网页：

[http://www.itscj.ipsj.or.jp/domestic/sc02/Old\\_Hanzi/lmd\\_docs/](http://www.itscj.ipsj.or.jp/domestic/sc02/Old_Hanzi/lmd_docs/)

另外其中大部分内容亦转载于宋镇豪·段志洪主编的《甲骨文献集成》四川大学出版社 2001 年第 14·19·38·40 卷，同电子版见 <http://www.cn-oracle.com/book.php>。论文中所使用的“文字域”概念，相当于“包摄范围”。

## 關於Old Hanzi 審議情況的意見

2007 年9 月4 日

日本・茨城大学 鈴木敦

### 摘要<sup>1</sup>

現在，根據Old Hanzi（以及WG2）系統而對甲骨文字進行的符號化作業〈從零開始〉正在進行之中。但在甲骨學界，類似的工作過去已經實施過2種方法。

其一是《甲骨文編》（中國社會科學院考古研究所編 科學出版社 1965 年）之編纂。它过分依赖《說文》而加以整理，很明显其包攝范围設定自身即不合理，而且可能出现 LABELING之处达到全文的 2 / 5 左右，參照现在的水准而言以失败告终也是不得以的。

另一為《殷墟卜辭綜類》（島邦男編 大安 1967 年）以及在此基礎上發展的《殷墟甲骨刻辭類纂》（姚孝遂編 中華書局 1989年）的編纂。這種方法以公開發表的所有甲骨文字為对象，避開《說文》的束縛，以甲骨文字自身部首為基礎進行了全面徹底的整理，雖然一些細節部分還有問題，但現已成為甲骨學界的規範標準。

現行根據Old Hanzi（以及WG2）所進行的工作，沒有沿襲以上的成果，基本採用與曾以失敗而告終的《甲骨文編》編纂方法同樣的方法，其結局很明朗化。認識甲骨學界的經驗和成果，活用《殷墟甲骨刻辭類纂》的成果，儘早朝這個方向轉換，合理進行“符號化作業”，我認為可以節省龐大的勞動力。

注 1・作為本論文的依據，筆者的諸篇論文全部刊載於以下網頁：

[http://www.itscj.ipsj.or.jp/domestic/sc02/Old\\_Hanzi/lmd\\_docs/](http://www.itscj.ipsj.or.jp/domestic/sc02/Old_Hanzi/lmd_docs/)

另外其中大部分內容亦轉載于宋鎮豪・段志洪主編的《甲骨文獻集成》四川大學出版社 2001 年第 14・19・38・40 卷，同電子版見 <http://www.cn-oracle.com/book.php>。論文中所使用的“文字域”概念，相當於“包攝範圍”。

## 中文要旨 (GB & BIG5)

### 关于Old Hanzi 审议情况的意见

2007 年9 月4 日

日本·茨城大学 铃木敦

#### 摘要<sup>1</sup>

现在, 根据Old Hanzi (以及WG2) 系统而对甲骨文字进行的符号化作业 (从零开始) 正在进行之中。但在甲骨学界, 类似的工作过去已经实施过2种方法。

其一是《甲骨文编》(中国社会科学院考古研究所编 科学出版社 1965 年)之编纂。它过分依赖《说文》而加以整理, 很明显其包摄范围设定自身即不合理, 而且可能出现 LABELING之处达到全文的 2 / 5 左右, 参照现在的水准而言以失败告终也是不得以的。

另一为《殷墟卜辞综类》(岛邦男编 大安 1967 年)以及在此基础上发展的《殷墟甲骨刻辞类纂》(姚孝遂编 中华书局 1989年)的编纂。这种方法以公开发表的所有甲骨文字为对象, 避开《说文》的束缚, 以甲骨文字自身部首为基础进行了全面彻底的整理, 虽然一些细节部分还有问题, 但现已成为甲骨学界的规范标准。

现行根据Old Hanzi (以及WG2) 所进行的工作, 没有沿袭以上的成果, 基本采用与曾以失败而告终的《甲骨文编》编纂方法同样的方法, 其结局很明朗化。认识甲骨学界的经验和成果, 活用《殷墟甲骨刻辞类纂》的成果, 尽早朝这个方向转换, 合理进行“符号化作业”, 我认为可以节省庞大的劳动力。

注 1. 作为本论文的依据, 笔者的诸篇论文全部刊载于以下网页:

[http://www.itscj.ipsj.or.jp/domestic/sc02/Old\\_Hanzi/lmd\\_docs/](http://www.itscj.ipsj.or.jp/domestic/sc02/Old_Hanzi/lmd_docs/)

另外其中大部分内容亦转载于宋镇豪 段志洪主编的《甲骨文献集成》四川大学出版社 2001 年第 14· 19· 38· 40 卷, 同电子版见 <http://www.cn-oracle.com/book.php>。论文中所使用的“文字域”概念, 相当于“包摄范围”。

## 關於Old Hanzi 審議情況的意見

2007 年9 月4 日

日本・茨城大学 鈴木敦

### 摘要

現在・根據Old Hanzi (以及WG2) 系統而對甲骨文字進行的符號化作業<從零開始> 正在進行之中・但在甲骨學界・類似的工作過去已經實施過2種方法・

其一是《甲骨文編》(中國社會科學院考古研究所編 科學出版社 1965 年)之編纂・它过分依機《說文》而加以整理, 很明顯其包攝範圍設定自身即不合理, 而且可能出現 LABELING之處達到全文的 2 / 5 左右, 參照現在的水准而言以失敗告終也是不得以的。

另一為《殷墟卜辭綜類》(島邦男編 大安 1967 年)以及在此基礎上發展的《殷墟甲骨刻辭類纂》(姚孝遂編 中華書局 1989年)的編纂・這種方法以公開發表的所有甲骨文字為對象・避開《說文》的束縛・以甲骨文字自身部首為基礎進行了全面徹底的整理・雖然一些細節部分還有問題・但現已成為甲骨學界的規範標準・

現行根據Old Hanzi (以及WG2) 所進行的工作・沒有沿襲以上的成果・基本採用與曾以失敗而告終的《甲骨文編》編纂方法同樣的方法・其結局很明朗化・認識甲骨學界的經驗和成果・活用《殷墟甲骨刻辭類纂》的成果・儘早朝這個方向轉換・合理進行“符號化作業”・我認為可以節省龐大的勞動力・

注1・作為本論文的依據・筆者的諸篇論文全部刊載於以下網頁：

[http://www.itsci.ipsj.or.jp/domestic/sc02/Old\\_Hanzi/lmd\\_docs/](http://www.itsci.ipsj.or.jp/domestic/sc02/Old_Hanzi/lmd_docs/)

另外其中大部分內容亦轉載于宋鎮豪 段志洪主編的《甲骨文獻集成》四川大學出版社 2001 年第 14・ 19・ 38・ 40 卷, 同電子版見 <http://www.cn-oracle.com/book.php>・論文中所使用的“文字域”概念, 相當於“包攝範圍”。

## Old Hanz 審議状況への意見

2007 年 9 月 4 日  
日本・茨城大学 鈴木敦

### 要旨 [注 1]

現在、Old Hanz (ならびに WG2) による甲骨文字の符号化作業が <ゼロから> 進行中である。しかし、甲骨学界においては、既に過去 2 通りの方法で同様の作業が行われている。

一つは『甲骨文編』(中国社会科学院考古研究所編 科学出版社 1965 年)の編纂である。『説文』に引きずられた整理のため、包摂範囲の設定自体に不合理が目立ち、かつラベリング可能なものが全体の 2 / 5 程度に留まる等、現在の水準に照らせば失敗に終わったと言わざるを得ない。

もう一つは『殷墟卜辞綜類』(島邦男編 大安 1967 年)並びにこれを発展させた『殷墟甲骨刻辞類纂』(姚孝遂編 中華書局 1989 年)の編纂である。既刊の甲骨文字全体を対象に、『説文』の呪縛を逃れて甲骨文字自体の部首立てに基づく徹底的な整理が行われており、細部に問題を残しながらも、現在では甲骨学界のスタンダードとして機能している。

**現行の Old Hanz (ならびに WG2) による作業は、以上の成果を踏まえることなく、かつ失敗に終わった『甲骨文編』の編纂方法と基本的に同一の方法で進められている。その帰結は明らかである。甲骨学界の経験と成果を認識し、『殷墟甲骨刻辞類纂』の成果を活用する方向へと早急に転換することが、符号化作業を合理的に行い、かつ膨大な労力の節減になると考える。**

### ：現状認識

A : Old Hanz 並びに WG2 における甲骨文字の符号化作業は、以下の手順で進行中である。

1 : 既刊の甲骨文字資料全体を視野に入れ、一定の基準に基づき甲骨文字のリスト化・DB 化を行う。[担当 : Old Hanz]

個々の字形の差異をどこまで「有意の差異」と見なすかが問題になるが、この段階では、かなり細かなレベルまで「有意」として区別している【注 2】

2 : 1 の成果を、一定の基準に基づいて検討し、同一字として統合できるものは統合して、包摂範囲を確定し、レパートリーを作成する。[担当 : Old Hanz]

結果的に、上記 1 ほど細かな区別は行わない。

3 : 2 で定めた個々の文字の包摂範囲に対してコードを振る。[担当 : WG2]

コードの順番はどんなものでもよいが、一つの包摂範囲に対して一つのコード番号が一意に対応しなければならない。換言すれば、「1 : 多」「多 : 1」「多 : 多」の対応は、いずれも不可である。

4 : 2 で定めた個々の文字の包摂範囲に対して、ラベリングを行う。[担当 : WG2]

現状では、『説文』部首によるラベリングが企図されている。

B : 審議には古文字の研究者も関わってきたが、古文字の中でも特に甲骨文字を専門とする人間は関わってこなかった。その結果、甲骨文字の実態にそぐわない部分も見受けら

れる。

### ：斯界の経験の有効活用を

甲骨文字研究の世界では、既に上記の Old Hanzhi の手順と基本的に同一の方法で甲骨文字の包摂範囲整理が行われている(中国社会科学院考古研究所『甲骨文編』科学出版社 1965 年)【注 3】結果は以下に記す通りであり、結論としてこの方法は失敗に終わったと言わざるを得ない。

- a：甲骨文字の字形の偏差は、篆書以降の文字に比べて甚だしく大きい。『甲骨文編』編者は、上記 1 段階相当の作業では、Old Hanzhi N1271-4 同様、字形弁別について一定の基準を立てようとしたと想像されるが、実際の編纂作業に当たって全ての字形に統一的に当てはめることは不可能であったと見えて、結果は甚だ混乱したものとなっている。
- b：『甲骨文編』編者は、上記 2 段階相当の作業では、「字義の同一性」に基づいて「字形の(小さな)差異」を無視して統合する、という作業を行ったと想像されるが、甲骨文字の字義は「現代の文字との形造的な相似」では知り得ない。「ある甲骨文字が、甲骨文の中でどのように使われているか」を、膨大な用例から帰納する以外に方法がない【注 4】『甲骨文編』は、そのような検討を行うことなく統合作業を行った結果、種々問題のある包摂範囲を設定することになった。
- c：『甲骨文編』編者は、上記 3・4 段階相当の作業では、各包摂範囲を「『説文』部首に基づいてラベリングし、『説文』部首順に配列し、冒頭から 4 桁の通し番号を振る」方法を使った。その結果、包摂範囲と番号との関係が「1：多」(例えば「翬」に対して「0004(吏)」「0388(史)」「0389(事)」「1003(使)」が対応)となったり「多：1」(例えば「廸」と「翰」が共に「1704(巳)」に対応)となったりという事態が多発した【注 5】
- d：甲骨文字の中には、『説文』編纂以前に消滅したものが多数あるため、上記 4 段階で、『甲骨文編』編者が立てた包摂範囲約 5,000 字の内、ラベリングができたものは約 2,000 字に留まり、残りの約 3,000 字はラベリング不能・検索不能に陥った。

「全ての甲骨文字を対象として、統一的かつ論理的な基準に基づいて包摂範囲を定め、一意に対応する番号を割り当て、ラベリングを行う」という作業は、甲骨学界においては戦前に始まり、『甲骨文編』の失敗を経て、開始から半世紀以上たった 80 年代末に漸く『殷墟甲骨刻辞類纂』を生むに至った。その背後には多数の甲骨学者の膨大な努力がある【注 6】これと同様の作業を「専門家以外の人間集団で・ゼロから・ほんの数年で」実行し、かつ『殷墟甲骨刻辞類纂』を凌駕する合理性と使い勝手の良さを備えた成果を纏めようとするは無謀と言わざるを得ない。

斯界には、既に上記の作業結果としての『殷墟甲骨刻辞類纂』が存在する。そのベースとなったのは、同書の編纂時 = 1980 年代までに公刊されていた全ての甲骨文字資料であり、Old Hanzhi の議論が底本とする 11 種の甲骨資料の殆どをカバーしている。つまり、少なくとも上記 1・2 段階の作業は、既に専門家の手で基本的に完了しているのである。上記 1・2 段階の作業で、現段階で行うべきは、以下の 2 点と考える。

- a : 『殷墟甲骨刻辞類纂』に漏れている資料について精査し、既存の包摂範囲に含められない文字があれば (= 少数と予想される) 包摂範囲を追加新設して収める【注7】
- b : 『殷墟甲骨刻辞類纂』の包摂範囲の内容を再検討し、もし不合理があればなるべく修正する【注8】

## 注

- 1 : 本件の論拠となる筆者の諸論文は、  
[http://www.itscj.ipsj.or.jp/domestic/sc02/0ld\\_Hanzi/lmd\\_docs/](http://www.itscj.ipsj.or.jp/domestic/sc02/0ld_Hanzi/lmd_docs/)  
 に、全て掲載している。また、その大部分は  
 宋鎮豪・段志洪主編『甲骨文献集成』四川大学出版社 2001年 第14・19・38・40巻  
 同・電子版 <http://www.cn-oracle.com/book.php>  
 にも転載されている。なお論文中で用いた「文字域」という概念は、「包摂範囲」に相当する。
- 2 : IRGN1271の3および4に基づく認識である。「点の数」等への拘りもさることながら、甲骨文字の世界ではごく普通に存在するミラーリバーズまでも「有意の差異」の如く扱っていることには(仮に後々統合されるにしても)違和感を覚える。
- 3 : 同書冒頭の「編集凡例」を図1に示す。現行のOld Hanzi並びにWG2の整理方法と比較されたい。
- 4 : この方法の創始者・島邦男による『殷墟卜辞綜類』あとがきを図3に示す。包摂範囲の設定法、字義の確定法等、図1に示した『甲骨文編』のそれと対比して戴きたい。
- 5 : 該当部分を図2に示す。この問題はIRGN1271の5-4でも取り上げられ、「一つの部首に収められる」との方針が示されている。『説文』の部首立てに拠る以上、妥当な方針であるが、特定の例については採りうる方針が甲骨文字全てに対して・遺漏無く適応できるとは限らない。図2に示すように『甲骨文編』も同様の方針を立てているが、実際の整理においてはこれを貫徹できず、様々な混乱を生じている。
- 6 : 『殷墟甲骨刻辞類纂』の部首立てを図4に、包摂範囲を列挙した字形総表(の一部)を図5に、その背景にある用例研究(の一部)を図6に示す。
- 7 : 『殷墟甲骨刻辞類纂』は、IRGN1271の3に示された11編の内、(A)(F)(G)(H)を対象としている。資料数は約5万片に上り、(B)(C)(D)(E)(I)(J)(K)の合計1万数千片を大きく凌駕している。加えて、後者の大部分(=約14,000片)を占める(B)は、書名が示す通り(A)の編纂に漏れた資料の補遺という性格である。符号化すべき甲骨文字の字形で、前者に含まれないものは少数に留まると判断される。
- 8 : 作業の膨大さに鑑み、某かの変更が生じる可能性は否定できないが、包摂範囲の体系を揺るがすような大変更はないと予想している。

圖 1：『甲骨文編』編輯凡例

編輯凡例	
<p>一 本編收字，以實物照像及拓本覆印為主，至摹本中有罕見之字，亦酌為收錄。所收之書及書名簡稱，見引書簡稱表，附於卷末。</p> <p>一 所收各字，均依原文摹錄。凡印本漫滅無法臨摹的字，皆不入錄，以免謬誤。</p> <p>一 凡一字而同版數見的，除字體特異者外，餘均版錄一字，不再標注每版所見的字數。</p> <p>一 凡一版而各書重複互見的，僅錄其一。有印本則錄印本而不錄摹本；如同係印本，則選較好者入錄。</p> <p>一 分部別居，悉依說文解字。每字之首，冠以說文的篆文，並注明此編的順序數，以清眉目。</p> <p>一 凡一字而有數解的，兼存異說，於其字下注明「某人釋某」，以備參考。</p> <p>一 凡一字而具數體的，用說文或體之例，於其字下注明「某或為某」。</p> <p>一 凡一字而有數用的，用互見之例，於其字下注明「用某為某」，「某用為某」，以資區別。</p> <p>一 卜辭中有關考證的重要辭例，選錄其一二條，分別附注於所收各字之下。</p> <p>一 甲骨文文字有可以按其偏旁隸定者，雖為說文所無，仍用徐鉉新附之例，附於各部之後，注明「从某从某，說文所無」。每字之首，冠以隸定的字體。</p> <p>一 甲骨文中合書之字甚多，別為「合文」一卷，附於「正編」之後。</p> <p>一 不能辨認的字，或其字雖經學者考釋而尚未成定論者，畧依其偏旁所從分類，收入「附錄上」。校改時從正編和附錄中所抽出來的字以及寫定後所補收的新字，均列入「附錄下」。</p> <p>一 本編所錄，以同文異體字為主。至於同文同體的字，如干支卜貞等，少則數十見，多則數千見，其辭例足供考覈，而文繁不煩備錄，仍依茲編次第，別錄為「甲骨文索引」，另書印行。</p> <p>一 卷末附檢字一卷，以供檢查。數字代表卷葉，合字代表合文，附字代表說文所無，按其偏旁隸定而附載於各部之後者。</p>	<p>編輯凡例</p> <p style="text-align: center;">三</p>



図3：『殷墟卜辞綜類』あとがき

## あとがき

島 邦 男

今から三十数年前、私がまだ学生の頃、宇野哲人先生が講義の餘談に、全文から甲骨文を話されて、甲骨文字は偽作であると申された。私はひどく興味をそそられ、いつかはこれを研究してやろうと考えた。これから興味は次第に文字の方面に傾き、乏しい財布をはたいては文字學の書物や、甲骨文字の資料を購入したが、唐蘭氏の古文字學導論を読んで驚いたり、孫海波氏の甲骨文編に望洋の嘆を發する未熟者で、甲骨學に入る戸口は解らず、ただ積んで置くだけであつた。その後偶々「上帝」の神格を調べて、朱子から溯つて詩・書に及んだがどうも解らず、甲骨文字の世界ではどうなつてゐるだらうかと考えた。そこで勇敢にも、上帝に關する甲骨文を全部調べて解讀しようと思ひ、文求堂で何かと教えを受けて、これに取りかかつたのが、私が卜辞研究に入った動機である。入つて見て驚いたことは、調べれば調べるほど、甲骨文字の解釋は管見と臆説に満ちていて、正に群盲が象を撫する觀を呈してゐることであつた。私は字形から文字を解釋するやり方に、失望すると同時にその限界を感じ、又昔讀から解釋するやり方にひどく不安を覚え、よりよい方法がないものかと日夜考へるようになった。ある時ふと漱石の小説の中に「理學は對象を固定することによつて成立している。研究對象が不安定である限り、學問は成り立たない。」という意味のことがあつたのを思い出し、卜辞の資料を確定することができないものかと考えた。然し甲骨文編に記されている資料が、果して日本で見られるかどうかを知らない私にとっては、これは夢に過ぎなかつた。上帝に關して平岡武夫教授の著書を見ると、甲骨文字が利用されてゐるので、ふとこの先生に會つたならば、日本に於ける甲骨文字の研究の状態がわかりはしまいかと思いつき、混雑する汽車に乗つて、のこ／＼でかけて行つたのは終戦後間もない頃であつた。

平岡教授との出會ひは、私を甲骨學に深く結びつける契機となつた。これから幾度か東北の片田舎から、京都の人文科學研究所に足を運び、時には幾日か滞在して甲骨文字の資料の吸収に努めた。その頃の或日、教授は索引のことを話され、そのついでに話はアメリカ人の日本語研究の方法に及び、彼等は日本語の語の結びつき方を、教書の書物から精密に分析歸納する仕方をとつてゐると、なに氣なく話された。これを聞いていた私は「これだ、この方法を卜辞の解讀に攝り入れることだ」と突嗟に思いついた。これからは研究所で得た資料によつて「祭祀の研究」をやる傍、乾乾と資料の分析と整理に努め、どうにかお粗末なものを作り上げることができた。

次いで京都に於ける日本中國學會の際、貝塚茂樹教授から、臺灣から贈られて来たばかりの小屯を見せてもらった。初めて見るこの膨大な資料を前にして、私は驚きと喜びと同時に、今までの整理の努力が水泡に歸したことを感じた。再び小屯を含めての資料の整理をやり直さねばならないからである。それから殆ど二年を費して、略々その整理を終つたが、その頃から新しい資料が續々と刊行されたので、二度整理をやり直さねばならなくなつた。

そこで私は新資料を含む全資料を徹底的に整理することを決意して、文部省に補助を申請した。それは今から八年前の昭和三十四年である。先づ資料の一片、一片の字數に従つて複寫を作る計畫を立て、殆ど二年を費やし原資料の略々十三倍の資料を作り上げた。次いで二千餘の本のケースを研究室に所蔵しと並べて一字々に分類したが、これだけで殆ど一年を費した。複寫機を操ることも、一片一片に切りとることも、その一片一片をその字の小箱を探して、これに投入することも、すべて自分一人でやる外はなく、この準備段階の作業は誠に容易ではなかつた。

その頃赤塚忠教授が研究室を訪ねて來られたが、この態をみて、あきれた顔をされるだけで、一言の批評の言葉もなかつたことを覚えてゐる。準備だけで既に三年、一字一字を更に用例に従つて分類し、時代順に整理して筆記してゆくとすると、この先幾年ででき上るのだらうかと、その頃はしきりに氣があせつた。それから初心忘るべからず、愚公が山を移したではないかと念じて、整理に没頭する毎日が続けたが、評書の段階が近づくにつれて、字釋をつけるか否かが、心を悩ますものとなつてきた。字釋をつけるのは容易だが、どの説を採るかとなるとこれは大問題である。幸に一昨年李孝定氏が甲骨文字集釋を刊布したので、字釋はこれに譲ることに心を決めることができた。こうして準備段階が終つてから五年後の本年九月六日に、漸く本文を完成することができたのである。これが殷墟卜辞綜類である。顧みれば私の生涯の事業であつた。

昭和四十二年九月二十四日 記

図4：『殷墟甲骨刻辭類纂』部首表

																			
壹九	壹九	壹九	壹九	壹七	壹六	壹五	壹五	壹四	壹四	壹四	壹三	壹三	壹三	壹二	壹二	壹二	壹二	壹一	壹一
																			
壹三	壹二	壹二	壹二	壹一	壹一	壹九	壹九	壹九	壹九	壹九									
																			
壹四	壹四	壹四	壹三	壹三	壹三	壹三	壹三	壹三	壹三										
																			
壹六	壹五	壹五	壹五	壹五	壹五	壹五	壹五												
																			
壹六	壹六	壹六	壹六	壹六	壹六	壹六													
																			
壹三	壹三	壹三	壹三	壹三	壹三	壹三													
																			
壹三	壹三	壹三	壹三	壹三	壹三	壹三													
																			
壹三	壹三	壹三	壹三	壹三	壹三	壹三													
																			
壹二	壹二	壹二	壹二	壹二	壹二	壹二													
																			
壹三	壹三	壹三	壹三	壹三	壹三	壹三													

部首表  
 (右為索引頁碼  
 左為本文頁碼)

図5：『殷墟甲骨刻辭類纂』字形總表（部分・全体は26頁）

<p>                  字 形 總 表             </p>
<p> <p>                     考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考                 </p> <p>                     0049 0048 0047 0046 0045 0044 0043 0042 0041 0040 0039 0038 0037 0036                 </p> </p>
<p> <p>                     非 非 非 非 非 非 非 非 非 非 非 非 非 非 非                 </p> <p>                     0077 0076 0075 0074 0073 0072 0071 0070 0069 0068 0067 0066 0065                 </p> </p>
<p> <p>                     祝 祝 祝 祝 祝 祝 祝 祝 祝 祝 祝 祝 祝 祝 祝 祝 祝 祝 祝                 </p> <p>                     0116 0115 0114 0113 0112 0111 0110 0109 0108 0107 0106 0105 0104 0103 0102 0101 0100 0099 0098 0097                 </p> </p>
<p> <p>10</p> </p>

